Courier Correo Courrier

October 2017
Volume 32, Number 2

Mennonite World Conference
A Community of Anabaptist related Churches

Congreso Mundial Menonita
Una Comunidad de Iglesias Anabautistas

Conférence Mennonite Mondiale
Une Communauté d'Eglises Anabaptistes

3
Inspiration and Reflection
聖書解釈の未来

今日および将来における聖書の役割

7
Perspectives
The Great Commission

14
カントリー・プロファイル
アルゼンチン

18
Resources
World Fellowship Sunday, Renewal 2027, Meet your Mission Commission, financial update

編集者よ

聖書を再発見すること、これが宗教改革の始まりであり、その結果でもありました。アナバプティズムもまた、この運動から生まれたのです。聖書が失われていたわけではありませんが、それは普通の人々の手の届かないところにありました。キリスト教徒であると自認する人々でも、自分の生き方について聖書に学ぶべきだとは思わない人が多かったのです。再洗礼派はとりわけ聖書に注意を向けたことで知られており、「聖書を重んじる人々」の異名で呼ばれることすらありました

メノナイト世界会議は、アナバプティズムを生み、聖書を吟味して日々の生活の導きを求めるよう促した宗教改革運動の500周年を覚えるよう、皆さんに呼びかけています。覚える、というのは、宗教改革には祝うべきことがたくさんある一方、悲しむべき教会の分裂もまた少なくなかったからです。これから10年をかけて宗教改革を覚えようというMWCの事業が、リニューアル2027です

リニューアル2027の最初の催しが、2017年2月に行われた「み言葉により変えられる：アナバプテストの視点で聖書を読む」という集会でした

今号の『クーリエ』では、再洗礼派運動の誕生を記念するこの集会での発表を特集します。同様の集会が10回にわたって毎年行われる予定です

急進的な宗教改革から500年たった今日、聖書はどのように読まれているでしょうか。紙ではなく、スマートフォンで聖書を読んでいる人もいるでしょう。自分の母語で、数種類の翻訳を読み比べられる人もいるでしょう。読まれ方が変わっても、読まれる物語は変わりません

聖書が神の言（ことば）であるという、私たちの信仰にゆらぎはありません。しかし、それがどのようにして書かれたか、私たちは理解を深め、それゆえに聖書の読み方も深めてきました

今号でも、平和委員会のアントニオ・フェルナンデス・ゴンザレスが呼びかけるとおり、私たちアナバプテストは「人となった神、イエス・キリストこそが神の言（ことば）である」という原点に立ちかえらねばなりません。書かれた言葉はわかりやすいので、私たちは読んだことからそのままわかりやすい結論を導きがちです。でもゴンザレスは、イエスを導きとすることを勧めます。神が聖書に霊感を与えたのであって、聖書が神ご自身なのではないのです

信仰と生活委員会のヴァレリー・レンペルは、私たちが敬愛する最初の改革者たちと同じ熱意をもって、聖書に向き合うようにといいます。ただし、私たちが暮らしているこの世のことを十全に踏まえながら向き合いなさいというのです。信仰を生き方に現すとき、他の信徒と（それも私たちと見解を異にする信徒と）歩み寄りたいと願いながら、「探求し、研究し、互いに学び、互いに愛と善業に励むように努めましょう。

「視点」のコーナーでは青年アナバプテスト委員会のメンバーが、聖書そのものを探求しています。五大陸の各地域を代表する若い指導者らが、それぞれの背景を踏まえて「大宣教命令」の意味を解釈しています

2017年は、ラテンアメリカで初めてアナバプテストの宣教が行われたアルゼンチンが宣教100周年を迎えます。今号のカントリー・プロファイルでは、教会指導者のマリオ・スナイダーがアルゼンチン福音メノナイト教会の物語を語ります

アメリカの宗教学者フィリス・ティクルによれば、キリスト教は500年ごとに転換点を迎えるのだそうです。宗教改革をきっかけに、この500年は聖書に焦点があてられました。もしかすると、別の焦点へと転換するときが訪れたのではないでしょうか。次の500年は私たちがもっと聖霊について学ぶ時になるという人もいます。2018年のリニューアル2027の催しは、「私たちをつくり変える聖霊」と題してケニアで行われます。ご期待ください

—カーラ・ブラウンはメノナイト世界会議の記者で『クーリエ』編集者。ウィニペグ（カナダ）在住

Courier connects the global Anabaptist family around the world twice a year through its publication in April and October. Our next issues will look at creation care and the Holy Spirit. Do you have photographs or artwork that illustrate those subjects? Submit your photography or artwork to photos@mwc-cmm.org for consideration for use in *Courier* and other MWC publicity. Or mail to "Courier submission," Mennonite World Conference, 50 Kent Avenue, Suite 206, Kitchener, Ontario N2G 3R1, Canada.

Cover Photo:

"Flight," an art installation by Lynn Leegte in the Verenigde Doopsgezinde Gemeente Amsterdam – Singelkerk (Mennonite church) in the Netherlands.

Photo: Karla Braun

Courier Correo Courrier

Volume 32, Number 2

Courier/Correo/Courrier is a publication of Mennonite World Conference. It is published twice a year, containing inspirational essays, study and teaching documents and feature-length articles. Each edition is published in English, Spanish and French.

César García Publisher
Kristina Toews Chief Communications Officer
Karla Braun Editor
Melody Morrissette Designer
Sylvie Gudin French Translator
Marisa & Eunice Miller Spanish Translators
Katano Atsuhiro Japantese translator

Courier/Correo/Courrier is available on request. Send all correspondence to:
MWC, Calle 28A No. 16-41 Piso 2, Bogotá, Colombia.

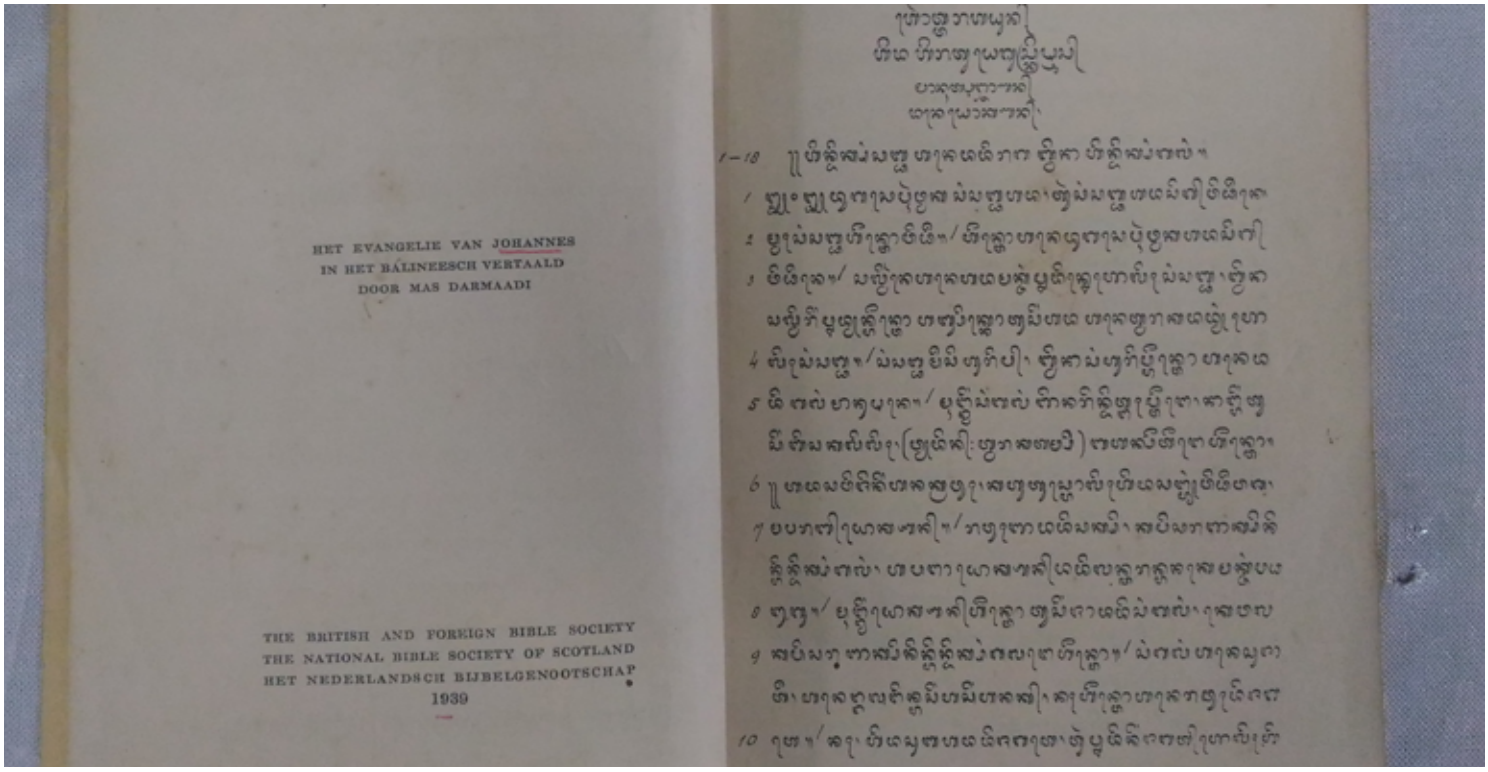
Email: info@mwc-cmm.org
Website: www.mwc-cmm.org
Facebook: www.facebook.com/MennoniteWorldConference
Twitter: @mwcmm
Instagram: @mwcmm

Courier/Correo/Courrier (ISSN 1041-4436) is published twice a year. See https://www.mwc-cmm.org/article/courier for publication schedule history.

Mennonite World Conference, Calle 28A No. 16-41 Piso 2, Bogotá, Colombia. T: (57) 1 287 5738.
Publication Office: Courier, 50 Kent Avenue, Suite 206, Kitchener, Ontario N2G 3R1 Canada. T: (519) 571-0060.

Publications mail agreement number: 43113014
Printed in Canada at Derksen Printers using vegetable-based inks on paper from a responsible sustainable forest program.

聖書解釈の未来



This photograph shows the inside of a Bible in Javanese script (Aksara Jawa). Javanese is one of the languages spoken in Indonesia where there are three Mennonite national churches.

Photo: Ezra Wirabumi, Gereja Injili di Tanah Jawa Semarang

アントニオ・ゴンザレス・フェルナンデス

ヨーロッパでは、「未来」について語るのはあまり愉快なことではありません。経済は危機的で、政治には展望がなく、宗教にも希望をもてる余地があまりありません。世俗化の波が教会を覆いつくし、代わってイスラム教がヨーロッパ大陸の多数派宗教になるという人もいます。ましてや「聖書解釈の」未来を語ろうなど、ほとんど無意味に思われるかもしれません。

聖書を解釈する方法など、もうすでに言いつくされたことだと思う人もいるでしょう。さらには、世俗化のおかげで聖書はすっかり脇へ追いやられてしまい、とくに見るべきものもなく、せいぜい、とっくに時代遅れになった宗教を学ぶ道具にすぎない、とすら思われているようです。

聖書の権威が失われたのは、何も世俗化だけのせいではありません。聖書解釈の伝統の変遷も大いに関わっています。古典的なカトリックの視点では、聖書のテキストは、教会が作りだす教義に権威を与える基礎となるものです。何世紀にもわたって、新たな知識が作りだされ、その権威がもとのテキストに積み重ねられていきました。

リベラルなプロテスタントの視点でも、聖書のテキストそのものに権威があるわけではありませんでした。権威はむしろ、歴史批評の方にありました。テキストを審判する文化的・理論的枠組みこそが権威をもちました。やがて、テキストよりもテキストの今日的意義の方が重視されるようになり、そうこうしているうちに、テキストそれ自体を否定してしまったのです。

このような状況で、「原理主義」という解決法には希望のある未来を期待できません。それは、「本物の」信仰者なら科学文明と決別すべきだ、という一種の知的犠牲を求めるものでしょう。原理主義は、自らもまた聖書解釈の一つのプロセスであるということを無視しています。アンセルムス的な贖罪の理解、あるいはアルミニウス的な恵みの理解、あるいは19世紀のダーウィンへの反論、あるいは千年紀をめぐる現代の憶測を、これらが生まれた時代背景から切り離し、聖書の中につねに存在していた教理として一緒くたにするのです。

むろん、聖書を解釈する責任を自分で引き受けるよりも、宗教的に権威あるところに解釈してもらいたがる人々は、いつの時代もいるでしょう。一方、権威の濫用に幻滅して権威主義を否定し、支配的な文化と妥協して聖書より高い地位を与えてしまう人々もいます。そして、原理主義に安住し、一時的な人間の教理を、聖書が伝える永久不変の教えと混同する人々がいることも、自然のなりゆきでしょう。

しかし、これらは所詮、壁に囲まれたすき間に安住しているにすぎません。そこは未来に道を開くような聖書解釈がなされるところではないのです。

では導きをどこに求めるべきでしょうか。かつて再洗礼派が聖書に向き合った方法の中に、探求する価値のあるものがある、と私は考えます。それはどちらかといえば新しい方法に思われるでしょう。すでに提唱されてはいたものの、ほとんど実践されてこなかったからです。

"Transformation is a process, like a road," says Tigist Gelagle of Ethiopia. She is mentor to the Young Anabaptists Committee.

Photo: Tigist Gelagle

Some of the ways the Anabaptists initially approached Scripture can offer us methods that are worth exploring.

言(ことば)の権威

なによりまず覚えるべきなのは、アナバプテストの観点からは、聖書解釈の権威は教会の権威でも、またカール・バルトのいう「紙の教皇」の権威でもない、ということです。権威は言(ことば)から、肉となった言(ことば)、メシアであるイエスご自身からくるのです。聖書解釈の前提は、見境なく受け入れることでも、文化的・疑似科学的に受け入れることでもなく、特定のテキストに権威を認めることです。聖書解釈の前提は、信じる者と主(しゅ)との間に出会いがおきること、その主こそイエスであるという告白がおきることです。

こうして、聖書がまずは相対的な性質をもつことが明らかになります。聖書は主イエスに対して相対的であり、主が聖書に対して相対的なのではありません。

これこそ、16世紀の初期再洗礼派が言ったことです。つまり、聖書はぶどう酒を入れる革袋であってぶどう酒そのものではない、と。聖書がぶどう酒そのものでないなら、そこに書かれたことは普遍的な教義マニュアルでも、他の普遍的な教義で置き換えられるべきものでもありません。むしろ、聖書に収められた教義はすべて、最上の言(ことば)であり、言(ことば)の性質を聖書に与える権威である、主を究極的に指し示すものなのです。

言(ことば)を指し示すもの

聖書が、キリスト・イエスを指し示す相対的なものであるということは、聖書解釈の未来にとってもう一つ重要な意味をもちます。それを「歴史実践性」とよぶことができるでしょう。復活した主と出会い、その権威を認めるということは、この主に従うための道具として聖書を用いる態度を導きます。再洗礼派がいう通り、主に従う生き方をしない限り主を知ることはできません。聖書は、神学の本である以前に、主に従うための手引書なのです。聖書にある、教義や世界観の要素を否定するのではなく、それらもまたイエスに従うことをつねに指し示していると捉えるのです。そしてこれは、あらゆる解釈につきものの、歴史的状況を反映した、実践的なプロセスです。

あらゆる解釈に実践的な性格が伴うということは、キリストのからだの一致のために、一定の謙虚さが当然必要になるということです。イエスに従う上で、私たちの聖書解釈は具体的な状況と結びつきます。状況は大切です。個々の教会の状況であれ、より広い文化的状況であれ、時代的な状況であれ、聖書のテキストはそれらの状況との関係で意味を帯びるのです。状況とのつながりを知ることは、解釈における霊的な側面を無視することではありません。むしろ、私たちを真理に導く聖霊もまた、歴史的な方法で、人々や状況や具体的な出来事を通して、私たちを導くということです。そうでないなら、そもそも私たちは聖霊を必要としないでしょう。いつの時代にも通用する、永遠の教義マニュアルがあれば十分だからです。

聖霊と言(ことば)

聖書解釈が霊的なプロセスであることは言うまでもありません。聖書を教義の体系と混同したり、聖書をより「近代的」な教義に基づいて評価したりすると、このことは忘れられがちです。

聖霊は思いのままに吹くものです。この「霊的な」自由こそ、イエスやパウロやヨハネが旧約聖書を読んだときに具体的に示した自由に他なりません。過去に定められた、確定的な意味を探すことから離れて、聖霊は新しい状況に基づく新しい意味の可能性を開き、死んだテキストを生きた言（ことば）へとよみがえらせるのです。

聖書解釈のプロセス

そういうわけで、聖書解釈のプロセスはつねに開かれたプロセスとなります。「確定的な」解釈を重んじるカトリックの視点ですら、同じ解釈に再検討を加えてきた歴史があります。聖書を不変の教義と捉える原理主義の視点ですら、過去の解釈を再検討したり新たな解釈を付加したりすることを避けられません。つまり、いかなる解釈も確定的であることを主張することはできないのです。

「明日はもっと明るくなるだろう」という初期再洗礼派の言葉があります。まさにそれゆえに、果てしなく積み重なる新たな解釈の澱（おり）に聖書が埋もれてしまうことはありえないのです。聖書があらゆる解釈に開かれているなら、確定的な解釈はなく、過去の解釈は相対化されます。そうすれば、おおもとの出来事に照らして、あらゆる歴史的経験が、その重要性にかかわらず、相対化されることになります。しかし、このおおもとの出来事とは、聖書を構成しているテキストのことではありません。おおもとの出来事とは、真正で確定的な神の言（ことば）であるキリストご自身です。

究極の規準

そういうわけで、開かれた聖書解釈は混乱を引き起こすものではありません。あらゆる聖書解釈には「究極の」規準があります。つまり、イエスご自身が確定的な神の言（ことば）である、ということです。聖書解釈を個人に任せてしまうことはできません。信徒はみな、同じ主と出会っています。その人たちの解釈を導くのは同じ聖霊です。

これこそ、16世紀の初期再洗礼派が言ったことです。つまり、聖書はぶどう酒を入れる革袋であってぶどう酒そのものではない、と。

Mario Hernández, from the Iglesia Evangélica Menonita de Tocoa, in Colón, Honduras, shared the transforming news of Scripture on the beach in La Ceiba, Honduras during a national Mennonite youth retreat.

Photo: Mario Antonio Hernández Aguirre

復活した主と出会い、その権威を認めるということは、この主に従うための道具として聖書を用いる態度を導きます。

As the MWC Commissions met in Germany in February 2017, they also meditated on Scripture.
Photo: Wilhelm Unger

それゆえ、聖書解釈は再洗礼派がよく理解した通り、共同のプロセスです。確定的な権威あるところに譲り渡せるものでも、教会や国家に雇われているプロの神学者（あるいはインターネットで検索できる新たな解釈）に代わってもらえるものでもありません。

共同という理想

こうしてみてくると、共同の解釈というアナバプテストの理想は大きな将来性を秘めていると言えます。共同の解釈にとって、個々の教会は解釈の務めを第一義的に担うものとなり、人間や教会の権威はすべて、メシアの確定的な権威に従うものとして相対化されます。具体的な共同体による解釈であるからこそ、共同の解釈は一時的な壊れやすいものとして、少なくとも教皇や牧師や神学者よりは自分の限界を知るものとして、自らを位置づけます。共同の解釈は確定的でないこと、つねに学び続ける必要があることを自覚します。

それはまた、聖霊の必要をも自覚します。どんな解釈も、知識をもてあそんだり人気取りに走ったりしないためです。初期再洗礼派のように、むしろ共同体の一致した合意を求めるなら、解釈は開かれたプロセスとなり、私たちの将来にも不可欠なものとなるでしょう。それは、教派を超えるくらい広がりをもち、しかし真理を見失うことなく、イエスに従い、へりくだって神と共に歩むプロセスなのです。

アントニオ・ゴンザレス・フェルナンデスはMWC平和委員会の委員。スペインの兄弟団の牧師。コイノニア神学センターの教師。この記事は、2017年2月12日にアウグスブルク（ドイツ）でのリニューアル2027「み言葉により変えられる：アナバプテストの視点で聖書を読む」での講演より採録した。

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼（バプテスマ）を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ福音書28:19-20）

今年のリニューアル2027（「み言葉により変えられる：アナバプテストの視点で聖書を読む」2017年2月12日ドイツ、アウグスブルクにて開催）では、YAB（ヤング・アナバプテスト）の委員がそれぞれの視点からマタイ28:19-20の聖句を読み解きました。今号の「視点」ではそのいくつかを紹介します。

パラグアイ
積極的な伝道を

ドミニク・ベルヘン

このテクストは、イエスが弟子たちに命じたものです。イエスは福音がすべての民に伝えられるよう、人々を用いようとしたのです。まずイエスは、弟子たちを用いました。それで弟子がさらに増え、彼らがさらに「弟子にしなさい」との命を受けていきました。こうして、キリストの弟子たちの集まりである教会の使命は、他の人々に福音を伝えることとなったのです。

「行って」という語は積極的です。イエスは「私が弟子にすべき人たちを連れてくるまで待っていなさい」とは言わず、「行って…弟子にしなさい」と言いました。ですから、キリストの弟子が弟子を増やしたければ、積極的でなければなりません。人々が教会に来てくれるのを待つのではなく、私たちの方がこの世へと出て行って、隣人と福音を分かち合うべきなのです。

そこで問題となるのが、自分の周囲の人々に、いかにして福音を分かち合うかということです。

伝道にはいくつか方法があります。南米でよく知られ用いられるのは、戸別伝道、大衆伝道、交友伝道の3つです。それぞれの方法には、とくに時間と伝わる深度の面で一長一短がありますけれども、いずれも有効であり、状況やニーズに応じて用いることができるものです。

パラグアイのメノナイト・ブレザレン教会では、地域社会に働きかける方法が用いられます。貧しい子どものための施設を建てたり、病院や学校、教会を建てるなど、つねに地域のニーズに沿った活動です。さらに、教会はラジオ局も開設して、福音とキリスト教について放送しています。

こうした組織を通じて、私たちの周りにいる人々に基本的な奉仕を提供することで、福音を分かち合うことができるのです。

青年会などではサッカーも行なっています。パラグアイでは、バレーボールでも、バスケットボールでも、ベースボールでもなく、みんなが「フットボール」をします。そのため、土曜日や日曜の晩にサッカーをして人々を引きつける教会もあるのです。こうした行事の主な目的は、説教を聞いたり賛美したりすることではなく、サッカーを通して新しい友人をつくることです。友人になった人たちがやがて青年会に参加して、キリストを救い主として受け入れてくれたらいいと思います。

居心地がよいと人々に思ってもらえれば、青年会や聖書研究会に招くことができます。彼らが自ら参加しに来ることもあります。交友関係を通してキリストを救い主として受け入れる人もいますし、礼拝やキャンプを通して信じる人もいます。

ラテンアメリカでは、それぞれの教会がおかれた文化や文脈に適合するよう、伝道の形が変えられるべきだと考えます。どんな方法であれ、信徒は自然にかつ積極的に、キリストに対する自分の信仰を伝えるのです。

私たちは、伝道することが不寛容になることだとは考えません。十字架におけるイエスの贖いのわざが、天の父に至る唯一の道だと信じますし、それゆえ恵みと救いのメッセージを周囲の人々と分かち合うことは私たちの義務なのです。

ドミニク・ベルヘンは、パラグアイのメノナイト・ブレザレン教会会員。ヤング・アナバプテスト（YABs）委員会のラテンアメリカ代表を、MWC第16回大会（米国ペンシルベニア州ハリスバーグ、2015年7月）のグローバル・ユース・サミットからアウグスブルク（ドイツ）での執行委員会まで務める。ドイツで神学を学ぶにあたり、ラテンアメリカ代表を退任。後任はコロンビアのオスカル・スアレス。

オランダ

あなたが私の証人?

ヤンティネ・ハウシュマン

私たちには、神に課された働きがたくさんあります。殺してはならない(出エジプト20:13)、盗んではならない(同20:15)、隣人のものを欲してはならない(同20:17)、平和と真理に沿った生き方をしなさい(ローマ12:18)などです。

これらの命令には、私たちの生き方を変えるよう求めるものが少なくありません。よりよくふるまいなさい。気前よく与えなさい。悪いことをする人たちをゆるしなさい、など。

他の人々の命にかかわる命令もあります。貧しい人、飢えている人、衣服が必要な人たちの世話をしなさいというものなどです(マタイ25:34-36)。

それでは、マタイ28:19-20でイエスが弟子に命じた命令はどうでしょう。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼(バプテスマ)を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」

メノナイトを含むキリスト教徒には、この命令を聖書で最重要とする人が少なくありません。この命令のおかげで、こんにちの世界には多くのキリスト教徒がいるわけです。もし弟子たちが家族のもとへ、また日々の仕事に戻ってしまっていたらどうでしょう。イエスとのすばらしい時間を思い出すこともあったかもしれませんが、イエスの教えは次第に忘れ去られていったことでしょう。

でも実際は、キリストの教えにこだわった人々の集まりが、世界中にあります。私たちは愛と平和に対する希望と信仰とビジョンを分かち合い、MWCのような集まりに交わりを見出すのです。

多文化社会

しかし、オランダ出身の私には、この課題に取り組むのには問題もあります。オランダは多文化社会です。他の西洋諸国と同様、移民の数が戦後一貫して増えてきました。それは多くの恩恵をもたらしました。信仰を異にする人々を知ることで、私たちの文化は豊かになりました。

では、多文化社会でイエスの教えはいかに理解されるべきでしょうか。

私はムスリムの隣人のところへ行き、キリスト教に改宗するよう頼めばいいのでしょうか。ユダヤ教徒の友人に、あなたの信仰は間違いだと言えばいいのでしょうか。何がよいことか私が「教える」のでしょうか。どうも私にはそう思えません。

どんな背景や文化や宗教をもつ人とも、自分の信仰について話したいと私は思います。しかし、私の信仰が個人的なものであることも確かです。メノナイトの間でさえ、多くの違いがあります。自分とムスリムの友人の間に、他のキリスト教徒との間と同じくらい共通点が見つかることもあります。私の方が正しいなんて、相手に言うべきでしょうか。

私はむしろ、ヨハネ4章でサマリア人の女に対してイエスが示した模範に従いたいと思います。ともに座って水を飲み、互いに語り合い、そうして二人は信仰を分かち合いました。これが、すべての民と調和して生きる模範であると、私は思います。

世俗社会

しかし、ただ多文化社会に生きるだけでなく、私は世俗社会に生きてもいます。多くの人が、「教会制度」は時代遅れで、もはや信仰に意味はないと感じている社会です。ですから、私は自分がメノナイト教会の信徒説教者であることを伝えるようにしています。聞きにいらっしゃいと招き、私が信じる信仰や、キリスト教徒になることに関心があるかどうか、知ろうとします。

なにより、信仰の意味を人々に知ってもらういちばん強力な方法は、行動で示すこと、周りにいる人々と平和でよりよい世界をつくり出すことだと思います。それで私はイエスが言い残したもう一つの言葉を生きようと思うのです。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒1:8)。

信仰の意味を人々に知ってもらういちばん強力な方法は、行動で示すこと、周りにいる人々と平和でよりよい世界をつくり出すことです。

隣人に心をくばり、いつも親切にふるまい、人々のニーズに応えることで、私は課せられた務めを果たして生きたいと思います。私たちはみな、きっとできるはずです。

Jヤンティネ・ハウシュマンはヤング・アナバプテスト(YABs)委員会の委員。オランダのメノナイト総連合ヤウレ・メノナイト教会所属。

フィリピン

組織的な弟子づくり

エベネザー・モンデス

私は、フィリピンの小さな村で育ちました。都会から離れた、山と湖と農場の近くです。人のつながりが密な集落で、つつましく暮らしています。

私たちは人間関係を重んじます。持っているものを隣人たちと分け合い、いつか必要なときは助けてもらえるだろうと考えます。何世代かの人たちが一つ屋根の下で暮らすこともあります。私たちは感情豊かなところがあります。フィリピンの言葉には、他の言葉にはないような細かな感情をいい分ける言葉があるのです。

私たちのような貧しい集落では、何かが必要になると、主なる神にお願いをします。病気で苦しむ子どもがいれば癒しを祈り求めます。それしかできないからです。あなただってもし何も持っていなければ、きっと奇跡を経験して、どんなに小さなことも神の恵みとしてありがたいと思うでしょう。

私たちの牧師はやっと高校を卒業したくらいの人たちで、正式な教育を受けられた教会指導者はほとんどいません。メノナイトの神学校を出ている人は皆無です。私の夢は、若い人たちがもっと世界とふれあう機会を得て、適切な教育を受けて、神学的にもっと一つになれることです。

こんなふうにして、私はこの聖書のテキストに導かれます。イエスが地上での生涯の最後に残した弟子への指示です。

弟子の道の第一歩は、自分をキリストに明け渡すことです。まったく風まかせの、オールのないボートのように、キリストの意思に完全に身をまかせるのです。ただキリストに従って、持ち物をすべて売り払い、貧しい人に施したいと思う心を養うこと、それこそが弟子の心です。ちょうど初期のメノナイトが、信仰のために死ぬ覚悟をしたように、この世のものとは異なる平和な生き方をするために、あらゆるものを捨てる覚悟をするのです。

弟子の道の次のステップは訓練、つまりキリストに従う仕方を学ぶプロセスです。洗礼さえ受ければ、ただちに成熟した弟子になれるわけではありません。

第三のステップとして、弟子になるということは弟子づくりの責任を負うということです。弟子の道はあらゆる信徒の務めであり、牧師だけのものではありません。これはキリストに従う者の宿命です。イエスは熱心に弟子となる人たちを探し、自分に従うように招き、教え、世話をしました。それから、自分に倣うよう、そしてより多くの弟子をつくるように言われたのです。これはほんの少数の人の賜物ではなく、すべての人の責任です。

弟子の道を歩む熱意は、私たちが神の力と恵みを深く理解し十全に経験することから生まれます。

弟子を育て教える働きは、組織的に行われるべきだと思います。

フィリピンのメノナイト青年会では、教会を去る若者の増加に対応するしくみを作りました。この数ヶ月で若者の出席数は倍増し、多くの指導者が生まれました。育成と教育を組み合わせ、互いの人間関係と責任感を奨励することを心がけています。

私たちは若者をいく人か選び、牧会の働きに携わってもらいます。まずよい指導者になる方法、教え方、新しい信徒への接し方、小グループの導き方から教えます。習熟し自信をつけるに従って、互いにケアし合い、友達を誘い、自ら聖書研究会を開き、親・きょうだい・その友人にもアプローチして、キリストの弟子を増やしていくようになります。

だれもが互いに育み合い、責任を負い合うことを励ますような文化がもてるようになるといいと思います。そして、神学校を卒業した人たち、神学者たち、経験豊富な人たちには、あなたの知識を分け与えてくれませんか、とお願いしたいです。

この世において、平和の声を伝え広める者として意味ある働きをしようと思うなら、私たちはもっと意識して、キリストの命令に服従するよう努める必要があります。キリストの愛にどっぷりと浸かって、弟子の道を生きようという言葉にならない熱意を見出さねばなりません。アジアの私たちは出生率だけでなく、教会として、弟子の道を通して数を増していくのです。

The current YABs Committee (Young AnaBaptists) met in Germany in February 2017. Pictured (l–r): Ebenezer Mondez, Larissa Swartz, Makadunyiswe Ngulube, Oscar Suárez, Jantine Huisman.

Photo: Wilhelm Unger

エベネザー・G・モンデスはヤング・アナバプテスト（YABs）委員会の委員。フィリピンのルンバン・メノナイト聖書教会の会員。

アメリカ合衆国

招きの再発見

ラリッサ・スウォーツ

アナバプティズムの500周年を迎えるにあたり、あらためて大宣教命令のビジョンと熱意を思い起こすことはふさわしいことだと思います。この命令こそが、宗教改革期の再洗礼派の生活と宣教にとって、中心的なものでした。運動の当初から、実践的な弟子の道や共同体重視の姿勢と併せて、伝道的な説教が再洗礼派の強みだったのです。

米国では、キリストの「すべての民を弟子にしなさい」との呼びかけにもかかわらず、キリスト教は眠ってしまっています。世界の南側から西洋に伝道しようと、キリスト教徒がやって来ます。キリスト教徒の多数派はもはや白人ではなく、福音を知らない人々のところに宣教師が赴くよりも、そんな人々が「キリスト教圏」とみなされるところにやって来るのです。

こんにちでは、自分の街を離れることなしに、私たちは福音にまだ出会っていない移民や留学生の人たちに、愛をもって奉仕できるのです。

信仰への脅威

アメリカのキリスト教にとって最大の脅威は、多元主義と物質主義ではないかと私は考えます。イエスは本当に唯一の道でしょうか？ イエスは本当に世界でもっとも尊いでしょうか？ 比較的裕福で、快適で、個人主義的で、物質主義的な社会に住んでいると、こうした問いに答えるのが難しくなります。でも、この問いに「その通り」と言えれば言えるほど、喜びをもって宣教に取り組めると私は思います。

多元的で多文化的で世俗的な社会では、他人に入信するようすすめることにはより慎重になりますし、信仰を個人の私的な事柄とみなす傾向があります。個人の信条は、他人の迷惑にならない限り、みんな違ってみんないい、と思われがちです。私たちの世代にとって「宣教」はもはやタブーです。帝国主義や西洋の植民地主義とほぼ同義だからです。

神について、いかに聖なる生き方をすべきかについて、私たちはみな信仰に限界を抱えています。他教派のキリスト教徒や、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、無神論の人たちと関わる中で、メノナイトとして育った私の信仰は試されたり広げられたりしてきました。異なる文化の背景をもつ人々の方が、神をよく理解していることもあります。たとえ異なっていても、イエスのメッセージは変わりません。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ14:6）。

究極の真理を得ていると、私たちはどうして主張できるでしょう。その答えは、私たちの思考様式や道徳性にではなく、他者との関わりのもち方にあります。真理であるイエスを謙虚な気持ちで示すべきであり、イエスのメッセージを私たち自身の文化や伝統に閉じ込めてしまってはいけないのです。

ともに旅路を歩みながら

私がもっとも勇気づけられるのは、いつもともにいるというイエスの約束です。イエスの命令は私たちだけでは達成できません。「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」（ヨハネ6:44）とイエスが言うとおりです。言葉と行いをもって福音を分かち合おうとすれば、イエス自身が自分について言ったことを私たちは信じるか、という問いに直面します。私たちは、イエスが神の子であり、地上においても未来永劫においてもまったき命であると信じますか？ イエスを知るという賜物が、何よりも素晴らしいと信じますか？

人々の心にはたらいて確信させ、神へと引き寄せるのは聖霊の働きです。キリストを広める者として、私たちがすべきことは、その招きに忠実であることです。自分の信仰に飽き足りてしまっているかもしれませんが、主なる神はいまも人々を引き寄せ続けています。パウロも「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう」（ローマ10:14）と釘を刺しているとおりです。

神は私たちを必要としているのではなく、私たちが望むなら私たちを通してはたらきます。

真に尋ね求める人々に、神はご自分をお示しになります（エレミヤ29:13）。神は私たちを必要としているのではなく、私たちが望むなら私たちを通してはたらきます。私たちが選ぶなら、神は私たちを用いて、人々を栄光のみ国へと導くのです。

ラリッサ・スウォーツはYAB（ヤング・アナバプテスト）委員会の委員。米国オハイオ州のロンドン・クリスチャン・フェローシップ（保守メノナイト教団）出身。

ジンバブエ

みんな招かれている

マカドゥニイスウェ・ングルベ

私が育ったアフリカ南部のジンバブエでは、キリスト教は文明や交易とともに先祖が受け取ったものでした。そうした背景から、自分が誰かにキリストのメッセージを伝える義務があると思ったことが私にはありませんでした。

大宣教命令はエリートのもの、宣教の務めを果たすようとくに「招かれた」人のものだ。キリストのからだの一員として、私はただ罪を遠ざけ、聖書を読み、祈り、天国へ行けるのを待っていればいいのだ。メッセージを広めるのは、ジンバブエの教会にキリスト教をもたらした人たちの仕事だ。宣教師というのは、私よりも肌が白くて、破裂音のない、私のよりも優れた言語を話し、遠いところから来る人のことだ。黒人が宣教師になるなんて、考えることすら必要がないことだ、と思っていました。

従うべき命令

でも今では、一度悔い改めたなら果たすべき義務がある、守るべき命令がある、それはイエス・キリストについて人に話すことだ、と思うようになりました。

キリスト教徒として、イエス・キリストの足跡に従い始めたなら、イエスのように愛したい、生きたい、そして何より、イエスが地上でそうしたように神の国について分かち合いたいと思うものです。私たちの責務は、迷う人たちにイエスを紹介し、救っていただくことです。

大宣教命令は、イエス・キリストに従うすべての人への命令である、と私はマタイ28章19節を理解しています。この命令によって、神の国は広まっていくのです。

弟子をつくる

弟子をつくるということは、私たちの日常を超え出る行いを必要とします。自分の快適な状態から外に出るということです。見知らぬ人に近づいてイエス・キリストについて話さなければならないこともあります。私の国では、人々の受けとめ方は様々です。相手と一対一でキリストのメッセージを分かち合おうとすれば、泥棒か大事な用事のない暇人と思われるかもしれません。私の場合、クルセードなどの伝道プログラムでキリストのメッセージを分かち合えば、反応はおおむね好意的です。

YABs danced and sang at the Renewal 2027 event in Augsburg, Germany. Pictured (l–r): MWC Chief Events Officer Liesa Unger, MWC president Nelson Kraybill, Makadunyiswe Ngulube, Deacon Commission member Enock Shamapani, Ebenezer Mondez, Larissa Swartz, Jantine Huisman.

Photo: Harry Unger

弟子をつくるということは、キリストに従う者が分かち合う相手を選り好みしないということでもあります。福音はすべての人のためのものです。キリストのメッセージについて、伝える側にも受け取る側にも差別はありません。イエス・キリストは、行って「すべての国の人々」を弟子にしなさいと言いました。人種・民族・言語・ジェンダー・年齢に関係なく、誰かにキリストを伝えるのに若すぎることも年を取りすぎていることもないのです。

私たちが他者やかれらの住む世界をどう見るかによって、その人たちがキリストのメッセージを受けとるのが相応しいかどうかを判断することがあってはなりません。神の恵みは賜物であり、それを受けるのに十分善いとか、逆に悪すぎるとかいうことはないのです。聖霊が一人一人を変えてくださり、信仰の旅路を歩ませてくださいます。

この地上を歩むとき、キリストの命令を守っているでしょうか。これが永遠の命と永遠の刑罰に関わる問題だということを理解すれば、熱心に弟子づくりに取り組み、できるだけ多くの人たちにイエス・キリストを伝えようという目標ができるでしょう。キリストのメッセージをいつ・誰に伝えようか迷ったなら、よく考え祈りましょう。神の国はすべての人に開かれているのです。

マカドゥニイスウェ・ングルベはヤング・アナバプテスト（YABs）委員会の委員。ジンバブエのハラレにあるマウント・プレザント兄弟団（BIC）教会（ジンバブエBIC教団）の会員。

今日および将来における聖書の役割

by Valerie G. Rempel

16世紀、当時もっとも優れた神学者たちの中に、新しい仕方で聖書を読みだした人たちがいました。テキストそのものは変わりませんでしたが、ローマカトリック教会での経験、自らによる聖書研究、そして聖霊の働きにより、彼らは神の恵みや無償で与えられる救いについて、新しい理解を発展させていったのです。

イエスの弟子たち

初期の再洗礼派は、とにかく徹底的に聖書を読む人たちでした。神の支配（国）は国家ではなく教会を中心とすべきだと考え、キリストのからだ（教会）に属する者はそれに相応しい性質を目に見える形で示すべきだと主張しました。自らを現代版イエスの弟子と捉え、それゆえイエスの教えに特別な重きをおきました。気前よく与えること、敵を愛すること、癒し・正義・希望という神の働きに参加することなどです。成人による信仰告白に基づいた自発的な教会を作り、互いに助け合い、教会戒規を実践しました。

こうした初期の急進改革派の霊的末裔として、私たちの神学的伝統や教会実践はこれらの考えを反映してきました。しかし、500年近くたって、私たちの状況は大きく異なっています。政教分離は望ましい忠誠心についての神学的問題というより、私の住むアメリカでは、憲法に盛り込まれた政治的問題と捉えられています。

初期再洗礼派を迫害したかつての敵は、今や共に働く兄弟姉妹となり、宣教や地域の活性化、医療・福祉・教育などの事業に共同で携わっています。

今でも国教制度を批判し、キリスト教に特権を与えるような政治的・文化的現実はなくすべきだと考えていますが、他方では妥協を受け入れ、歓迎すらしています。そうこうするうち、次第に社会は世俗化し、次第に世俗化した教会が幅をきかせるようになりました。

もう一度徹底的に聖書を読む

それでもなお、初期再洗礼派の精神を受け継いで徹底的に聖書を読むことが、今日求められていると思います。テキストが変わったからではなく、私たちが生きている時代が変わったからです。神の言葉に改めて向き合い、自らの神学的伝統をふまえ、キリスト教徒としてこの世を生きる知恵、すべての人をイエスに従う神の子になるよう招く宣教に取り組む知恵を探るよう求められているのです。

World Mennonites celebrated the transforming power of the Word at the first Renewal 2027 event in Augsburg, Germany, in February 2017.

Photo: Wilhelm Unger

積極的想像力と導く勇気

16世紀と同様、21世紀もまたアナバプティズムを求めています。神か国家か、という忠誠心の問題はまだなくなっていません。強い軍事力をもつ合衆国のような国に住む人たちにとって、安全を国家に守ってもらいたいという誘惑はとくに強いものです。

私たちは特権があることに慣らされて育っています。私の周囲では、社会の世俗化とそれが教会にもたらす影響とたたかう人々がいます。私たちはこの世が快適だと思って育っています。消費社会の魅力に抗って、簡素で惜しみなく与える生き方をするのが難しいこともあります。悲しむべきことに、同じ伝統の中でさえ神学的な違いをめぐって争い、イエスの救いを通して人も共同体も変えられるのだというメッセージを共に宣べ伝えることができずにいます。

私たちは積極的な想像力をもって、教会が名実ともにキリストのからだとなる方法を構想し、導く勇気を必要としています。これらについて聖書から学ぶ余地はまだたくさんあります。

アナバプティズムを分権化する

他にも変わったことがあります。何世紀もの間、神学運動としてのアナバプティズムは、主にメノナイトや他のアナバプテスト系教会の伝統と結びついていました。しかし今日、アナバプティズムは多様なキリスト教集団に受け入れられ、人々は教派よりもネットワークとしてつながり、出版物やウェブサイトを通して広まっています。世界中のキリスト教徒が、初期の再洗礼派運動を生み出した聖書の教えを発見し、それぞれの信仰共同体の内部でそれを実践しようとしているのです。

こうした人々はネオ・アナバプテストとか、スチュワート・マーレーの言葉で「素顔の」アナバプテストとよばれます。自分の教派の伝統にと

私たちは積極的な想像力をもって、教会が名実ともにキリストのからだとなる方法を構想し、導く勇気を必要としています。

どまりますが、長くアナバプテストの共同体を性格づけてきた神学の方向と実践に影響を受けています。「古い」アナバプテストと「新しい」アナバプテストが共に探求し、研究し、互いから学び合い、愛と善い行いについて励まし合う時代に生きるのはわくわくします。教会とこの世について私に希望を抱かせてくれます。

私が大切だと思うのは、アナバプテストの思想と実践を通して聖書を読むのは、単に過去を回復したり、私たちの霊的な先祖をたたえるためではなく、21世紀にイエスに従う者として忠実に生きるためだということです。かつての急進的な改革者たちの勇気を、神が私たちに与えてくださいますように。

ヴァレリー・G・レンペルは、フレズノ・パシフィック聖書神学校（米国カリフォルニア州フレズノ）の教授。カレッジ・コミュニティ教会の会員。
She spoke at Renewal 2027 – Transformed by the Word: Reading Scripture in Anabaptist Perspectives in Augsburg, Germany 12 February 2017. This paper has been adapted from her presentation.

Attendees at the Renewal 2027 event studied Acts 15:1–21 in small groups. They asked about controversial understandings of church practice that are a source of tension in each other's settings, then looked for insights from the passage.

Photos: Harry Unger

リニューアル2027「私たちをつくり変える聖霊」

2018年4月21日（土）
ケニア、キスムにて開催

リニューアル2027は、再洗礼派運動の開始から500年を記念する、10年がかりの催しです。

私たちをつくり変える聖霊」と題する1日がかりの会合が、ケニアのキスムにて開かれます。会合では、世界のアナバプテスト・メノナイトが聖霊をどう理解してきたか、また聖霊がこんにち私たちの世界的な交わりにどう働きかけているかを探ります。

アナバプテスト・メノナイトの講師による講演のほか、参加者全員による礼拝、賛美、話し合いがもたれます。会合に併せて、MWCの総会および各委員会、ネットワークの会議が開かれます。

今回が2回目となるリニューアル2027は、今後も各地域をまわりつつ年に1度開かれ、2027年のMWC第18回大会まで続きます。

くわしくは、MWCのホームページ（www.mwc-cmm.org/renewal2027）をご覧ください。

福音の熱心なしもべ

アルゼンチン・メノナイト教会の歴史

The Argentinian Mennonite pastors institute met in La Esperanza de Bragado country house 19–21 September 2017.

Photo courtesy of the centennial anniversary committee for Iglesia Evangélica Menonita Argentina (IEMA).

マリオ・O・スナイダー

私たち、アルゼンチン・メノナイト教会（IEMA）は、ジョセフ＆エマ・シャンク夫妻とトビアス＆メイ・ハーシー夫妻を（アメリカからの）最初の宣教師として迎えてから、ちょうど100周年を迎えます。かれらの働きは多くの人たちの人生をがらっと変えました。現在、国内各地にある50の教会と3600人の教会員は、その働きの生きた証です。

アルゼンチン・メノナイト教会（1917～2019年）

宣教師たちは4週間の船旅を経て、1917年9月11日にブエノスアイレスの港に到着しました。メソジストとバプテストの代表、アライアンス教団、アルゼンチン聖書協会らの出迎えを受け、相談や助言をもとに宣教の第一歩をふみだし、やがてブエノスアイレス州のペワホに拠点をおきました。

最初の1年半、かれらはアルゼンチンの国や人々、習慣、スペイン語を学ぶことに取り組み、訪問やフィールド調査を行なって定住地を決めました。さらに、ジョセフ＆エマ・シャンク夫妻は、「わたしはあなたの前に門を開いておいた。だれもこれを閉めることはできない」（黙示録3:8）の言葉のとおり、神に力と自信を与えられて、困難に向き合いました。

トビアス＆メイ・ハーシー夫妻もまた、「それで…あなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです」（ローマ1:15）と使徒パウロが示したのと同じ熱意をもって、信仰と熱心を示したのでした。この聖句は仕事を始めたばかりの最初の宣教師の思いをよく伝えています。かれらはまさに、限りない決意をもって全国をまわる、熱心なしもべだったからです。

こうした働きはすべて、後から来た宣教師たちや、アルゼンチン人の牧師たちに影響を与えました。その中には、もとはアライアンス教団出身で忠実なプロテスタント（アルゼンチンでは福音派とよばれる）であるアルバノ＆ケルビナ・ルアイザ夫妻などがいます。夫妻は積極的に通りや広場に出て、キリストが新しい真の生き方への希望であることを宣べ伝えました。

私たちは神に対して、またアメリカ合衆国とカナダのメノナイト教会の人々に対して、南アメリカへと宣教の働きを広げようと関心を示してくれたことに、感謝しています。

宣教100周年を祝う

こうして2017年9月16日、当時船が着いたところで現在はプエルト・マデーロとよばれる美しい住宅地の野外で、記念の催しが行われました。MWCのJ・ネルソン・クレイビル会長をはじめ、メノナイト・ミッション・ネットワークからジョン・ラップ、マデリン・マルドナード、リンダ・シェリーの各氏、地元のメノナイト教会の代表、近隣諸国のメノナイト代表やブエノスアイレス市

Evangelistic mission was carried out with the Bible car which provided lodging and a kitchen as workers travelled to outdoor meeting places.

The Mennonite church in Morón, Argentina, began by meeting in an old tram. Photo taken in 1973.

Tobias and Mae Hershey

Photos courtesy of the centennial anniversary committee for Iglesia Evangélica Menonita Argentina (IEMA).

の役人、18の教会代表、メノナイト教会員、運営にあたった牧師らが出席して行いました。

その日の晩には、地元の牧師や客人、来賓を交えて記念の会食も行いました。翌17日には、宣教師を派遣した教会の代表の臨席をいただいて、宣教記念大会を行いました。マルビナス・アルヘンティーナスのナルディニ市長には立派な施設を提供していただき、私たちは関係各位のご厚意を主に感謝します。私たちは引き続き、初代教会の人々や16世紀の再洗礼派の先人と同じ愛と犠牲と勇気をもって、主に仕えていきます。キリストとその支配を希望する福音を、主が再び地上に来られるまで、宣べ伝えていきます。

ペワホでの働きの始まり（1919年）

聖書協会の薦めによって、宣教をペワホから始めることが決まりました。神の言（ことば）を広めようと各地を巡回していた文書伝道者によれば、ブエノスアイレス州の西部には伝道の働きが見られなかったからです。最初の宣教師は1919年1月21日に到着し、26日には最初の礼拝がもたれ、賛美歌「主よ、みもとに」が高らかに歌われた、とエルネスト・スアレスがアルゼンチン・メノナイト教会50年記念誌で述懐しています。喜ばしいことに、私たちは最初に回心した人たちを個人的に知っているのです。私たちの親類であるカバドーレ家の人々、とくにパブロ、アニタ、マリア、サンティナ、ファットーネのニコラサおばあちゃんなどです。これらの人々

アルゼンチン

福音メノナイト・ブレザレン教会

教会員数	33
教会数	1
責任者	エステバン・アレヤンドロ・メメトゥ

メノナイト教会共同体

教会員数	
コロニア・ラス・デリシアス	292
パンパ・デ・ロス・フアナコス	376
エル・アルガロバル	14
ヌエバ・エスペランザ	67
責任者	オマール・オニシュク

東部ペンシルベニア・メノナイト教会（アルゼンチン支部）

教会員数	7
教会数	1
責任者	デービッド・ウィーバー

アルゼンチン・キリスト兄弟団

教会員数	75
教会数	2
連絡先	マリア・カリダード・ペルドーモ

アルゼンチン・メノナイト教会

教会員数	3650
教会数	79
連絡先	フアン・シーバー

* *はMWC加盟団体

出典：世界統計（2015年版住所録）

A church gathering in Morón in 1996.

Photo courtesy of the centennial anniversary committee for Iglesia Evangélica Menonita Argentina (IEMA).

は信仰を忠実に守り続け、全力で主に仕えた人たちです。

西部の町への宣教の拡大

やがて、トレンケ・ラウケン、カルロス・カサーレス、トレス・ロマス、ブラガド、その他多くの町に福音が伝えられ、教会が建てられ、キリストの弟子による小さな集まりができました。さらに、幼稚園や救護所、児童施設が開設され、その後は印刷所もできました。

ペワホには聖書学校が設立され、その後ブラガドの町に移転しました。やがてウルグアイのモンテビデオに移されてメノナイト神学校となり、ウルグアイ、ブラジル、パラグアイのメノナイトが学んでいます。この働きを大変な尽力で成し遂げたのが、ネルソン・リトワイラー宣教師で、彼は第二次世界大戦時にヨーロッパから避難した人々の定住事業にも関わっていました。避難民はウルグアイのモンテビデオに降り立ち、3つの居留地を作りましたが、彼らとの交わりは現在も続いています。

デルバート・アーブ教授の有用な研究によれば、アルゼンチンのメノナイト教会の歴史は4つの段階に分けられ、以下のように発展してきたと説明できます。

第1段階：宣教師による宣教活動の時期（1919年～1954年）

第2段階：移行の時期（1954年～1989年）。この時期には米国による宣教が終わり、外国人とアルゼンチン人が協働するスタイルに替わって、宣教団が以下の新しい原則を設けた。

(a) 自治、(b) 自給、(c) 宣教活動

こうして設けられた宣教計画は下記のとおり。

(1) パタゴニア・プロジェクト、
(2) 北アルゼンチン・プロジェクト、
(3) 中央地域プロジェクト、
(4) コルドバ教会プロジェクト

第3段階：全国組織形成の時期

第4段階：組織改革の時期（1989年～2019年）。アルゼンチン・メノナイト教会を4つの地域に分け、それぞれ独自の組織、指導体制、会議、活動を行う。

昨年、私たちは改革の進捗について評価を行い、「地の果てまで」宣教するため、改善すべきところを検討し祈り求めました。

私たちのありようと信仰

謙虚に、かつ真摯に反省するなら、宣教師と教会がつねに強調してきたのは「福音的」であること、つまり男も女も神の子らであり、兄弟姉妹であり、私たちはみなメンバーである、ということでした。公式にはメノナイト教会となっていましたが、アナバプテストの性格は、忠実な先人たちの歩みににじみ出てはいても、明確ではありませんでした。もう一つ別の教派を設けるよりも、私たちは自分をキリスト教徒と位置づけてきました。

しかし現在、私たちはアナバプテストの見地による信仰告白に導きを得て、知識と実践をさらに強化しなければならないと考えます。あらゆる教会団体に共通する問題を私たちも抱えており、解決すべき兄弟との深刻な紛争もあります。ですから、私たちと交わりにある世界の皆さんに祈ってくださるよう、心からお願いするものです。

マリオ・O・スナイダー、パブロ・スナイダー、ビリー・ヌエシュ、エリベルト・ブエノは、アルゼンチン・メノナイト教会（IEMA）の100周年記念委員会の委員。IEMAはアルゼンチンで最大のメノナイト系教会団体で、唯一のメノナイト世界会議加盟団体。国別データ表を参照。

IEMA leaders in 1990 (l–r): Mario Snyder, Sara Buhlman, David Dutra and Delfin Soto.

Photos courtesy of the centennial anniversary committee for Iglesia Evangélica Menonita Argentina (IEMA).

Missionaries Frank and Anna Byler and family.

MWC世界大会：インドネシア2021

数千の島々と数百の言語からなる多様性の国インドネシア。ここにも活気にあふれ成長するメノナイト教会が数多く存在します。この国にメノナイトと兄弟団が集まって、メノナイト世界会議の大会が2021年に行われます。

2017年の7月、インドネシアの三つのメノナイト教会団体で構成する国内諮問会議が、大会の第2回準備会合を開き、大会テーマと日程を協議しました。

三つのメノナイト教会団体（GKMI, GITJ, JKI）で構成する国内諮問会議を訪問するリーサ・アンガーMWC国際行事責任者。

（起立者写真左から）エンダン・ランラン・ブアナ（GKMI）、トゥリ・グナルト（GITJ）、アンディ・O・S（GKMI）、アグス・セティアント（GKMI）、リディア・アディ（JKI）、リーサ・アンガー（MWC）、パウルス・スジェン・ウィジャヤ（GKMI）、MZ・イチュサヌディン（GITJ）。（着席者写真左から）ダニエル・タレンタ（GKMI）、シモン・セティアワン（JKI）、スハルト（GITJ）、ヘリ・プルワント（GKMI）。

（アグス・セティアント撮影）

Worship Resource: World Fellowship Sunday

「私たちをつくり変える聖霊」

ヨエル2:28（口語訳、新共同訳は3:1）、ミカ3:8、使徒1:8、1コリント12:13

キリスト教会の歴史を通じて、イエスに従う人々は聖霊の力によってつくり変えられ、新たにされてきました。大きな困難に直面しても、希望をもって耐え忍びました。

こんにち、世界の南側の教会は、聖霊の臨在と力とにとりわけ注意を向けています。メノナイト世界会議のアフリカ地域代表が、2018年の「世界交わりの聖日」の礼拝資料を準備してくれました。

MWC世界交わりの聖日は、あなたの教会の皆さんに、世界のアナバプテストの信仰共同体に属することの意味を知ってもらうよい機会です。私たちは年に一度、世界のアナバプテストの兄弟姉妹とともに、礼拝して祝うのです。

礼拝資料には、こんにちのアフリカのアナバプテスト教会のスタイルで礼拝できるよう、祈り、賛美歌、聖書解釈、証しなどを提供しています。

この資料を用いて、あなたの地元の教会でも世界交わりの聖日を祝う礼拝をもってみてください。1月でなくても、2018年の都合のよい時でかまいません。どんな礼拝をしたか、MWC（photos@mwc-cmm.org）まで写真やメールを送ってください。

mwc-cmm.org/wfs

MWC financial update

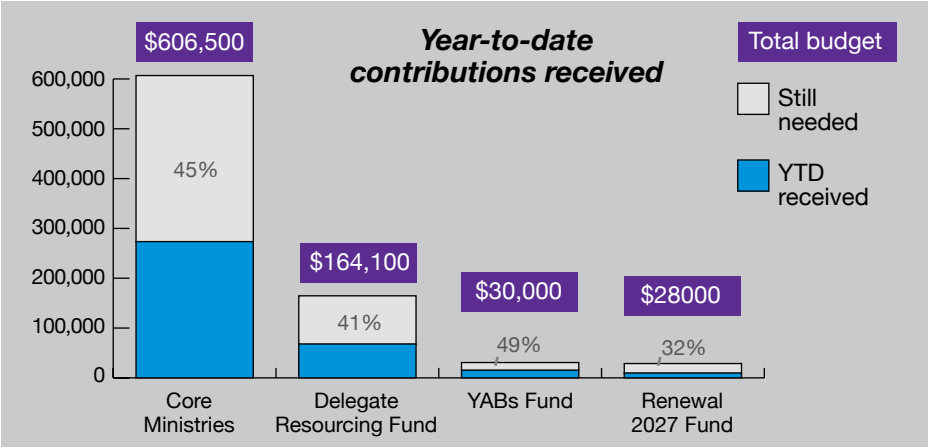
We are grateful for the steady flow of contributions in support of Mennonite World Conference, whether from our national member churches, local congregations, or individuals. During the first part of the year, we received strong support for our core activities; however we still rely on end-of-year contributions to meet our financial commitments. It is a challenge for us to anticipate how much we will receive when so many of the contributions are received in December.

In addition, MWC has designated funds that are used to carry out specific ministries. We encourage you to consider supporting these along with the core ministries of MWC.

Please consider how you might continue to support MWC's ministry and presence now, especially in these years between global Assemblies.

See **mwc-cmm.org/donate**

—Len Rempel, Chief Operating Officer



Contributions received as percent of budget as of 31 August 2017.

Give a gift to MWC

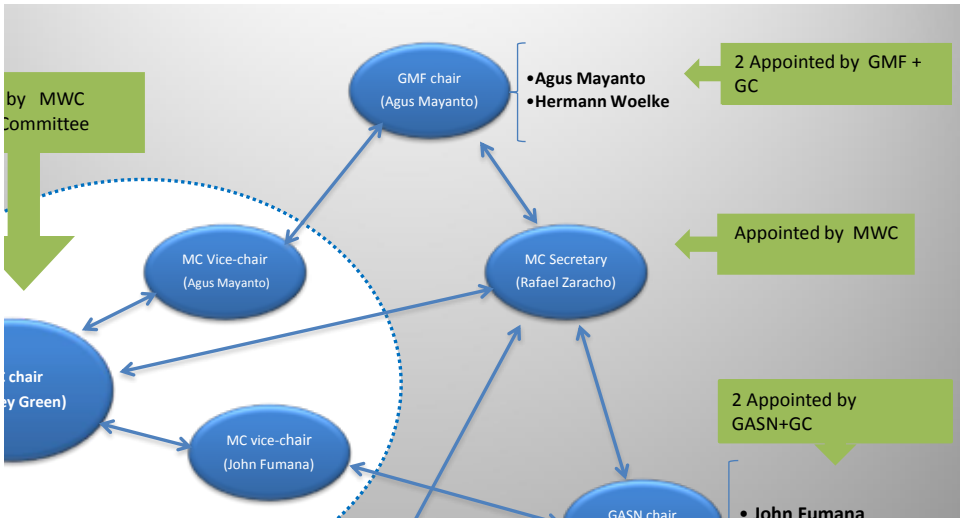
Your prayers and financial gifts are deeply appreciated. Your contributions are important. They will:

- Enable and expand communication strategies to nurture a worldwide family of faith,
- Strengthen our communion's identity and witness as Anabaptist Christians in our diverse contexts,
- Build up community through networks and gatherings so we can learn from and support each other.

Go to **www.mwc-cmm.org** and click the "Get involved" tab for prayer requests and on the "Donate" table for multiple ways to give online. Or mail your gift to Mennonite World Conference at one of the following addresses:

- PO Box 5364, Lancaster, PA 17808 USA
- 50 Kent Avenue, Kitchener, ON N2G 3R1 CANADA
- Calle 28A No. 16–41 Piso 2, Bogotá, COLOMBIA

宣教委員会を紹介します



(L–r): Andi Santoso, Agus Mayanto, John Fumana, Philip Okeyo, Rafael Zaracho, Stanley Green, Hermann Woelke, Kelbesa Demena, Barbara Hege-Galle.

Photo: Wilhelm Unger

宣教委員会は、世界規模での証しと奉仕について対話を進めるため、資料と話し合いの場を提供します。

宣教委員会は、グローバル・アナバプテスト・サービス・ネットワーク（GASN）と、グローバル・ミッション・フェローシップ（GMF）の二つのサブ委員会からなり、対話と方向づけを進めています。世界で活動する120余りの宣教・奉仕団体が参加しています。

GMFに参加する宣教団体や教会に対し、宣教委員会は世界・大陸・地域・各国レベルでの連携を促し、とくに人々がまだイエス・キリストを聞いたことがないところに目を向けます。

GASNに参加する奉仕団体に対し、宣教委員会は団体間の対話と協力を促し、あらゆるところから寄せられる救援のニーズに応えるようにします。

宣教委員会は、互いの学び合いと支え合いの場を提供していきます。2018年4月にナイロビで開かれるMWCの3年に1度の会合でも、GMFとGASNの会議「世に遣わされる」が4月17日から20日の日程で開かれます。

宣教委員会のラファエル・ザラチョ事務局長とスタンリー・グリーン委員長は「世界・大陸・地域・各国のレベルで連携し、積極的に外に出て対話とサポートを進められるよう促したい」と話しています。

宣教関連の資料紹介

MWCのホームページ（www.mwc-cmm.org/missionresources）には、MWCの宣教声明「宣教に携わる神の民：アナバプテストの見地」を含む、アナバプティズムと宣教に関する基本的な文書があげられています。

近刊予告

上記の声明を元にした新刊書『宣教に携わる神の民：アナバプテストの見地』が、ケニアでのMWC会合に合わせ世界アナバプテスト文庫の一巻として出版されます。アナバプテスト

の教会がもつ多様な地域性と経験と声を代表する10人の著者が、10の声明文のそれぞれについて、宣教の聖書的・神学的・牧会的な基盤をアナバプティズムの見地から論じます。ワークショップやトレーニング、日曜学校や神学校のクラスで、対話・黙想・行動への指針を得るのに最適です。

宣教委員会の委員

- スタンリー・グリーン（委員長、米国）
- アグス・マヤント（副委員長、GMF委員長、インドネシア）
- ジョン・フマナ（副委員長、GASN委員長、コンゴ民主共和国）
- ラファエル・ザラチョ（事務局長、パラグアイ）
- ケルベッサ・デメナ（エチオピア）
- バーバラ・ヘゲ＝ガレ（ドイツ）
- フィリプ・オケヨ（ケニア）
- アンディ・サントソ（インドネシア）
- エルマン・ウォルク（ウルグアイ）

会長のコラム

過去を覚え、未来を展望する

Wolfgang Krauss leads an Anabaptist history walking tour in Augsburg.

Photo: Nelson Kraybill

今年、ドイツのアウグスブルクで行われたメノナイト世界会議の執行委員会で、メンバーとともに旧市街を歩き、再洗礼派のことを学ぶ機会がありました。私たちが立ち寄った大きな家では、1528年のイースターの朝に、不法な会合をしていた88人もの再洗礼派が見つかったそうです。イースターの聖日に逮捕された人々は、追放されたり、拷問されたり、処刑されたりしました

「今はもう迫害されなくなってよかった」とメンバーの1人がいうと、すぐさまエチオピアの委員が手をあげて「今もある迫害のことを教えてあげようか」といいました。世界の南側では、アナバプテストの教会が迫害に苦しみ、たたかいながら成長しているところもあります。アウグスブルクで過去を「ともに」覚える経験ができたことは、多様なアナバプテストの人々が理解し合う助けとなりました。

MWCがアナバプティズムの500周年を祝うことはふさわしくないのではないか、という人もいます。埃をかぶった歴史を掘り返して、大昔に教会を指導したヨーロッパ人男性を賞賛するのか、と。そうではありません。ヨーロッパの再洗礼派の源流をたどることは、私たちが地球規模で話し合い、学んだことをこんにちの教会の経験と結びつけ続けていくなら、有意義なものになるでしょう。

アウグスブルクで2月に開かれたMWCのリニューアル2027の催しでは、五大陸を代表するアナバプテストの若者が、大宣教命令をどのように自分の文脈で実践しているかを報告する機会もありました（今号の「視点」を参照）。イベント全体を通して強調されたのは、歴史を美化するのではなく、神の民が今もこれからもあずかる宣教の重要性です。2018年のリニューアル2027はケニアで行われ、アフリカのアナバプテストの物語に焦点があてられます。

歴史上由緒ある場所や出来事を覚えることには、偶像崇拝の危険が伴います。ちょうど、他教派のイコンが偶像崇拝の危険と無縁でないように。しかし、イコンはまた神を展望する窓にもなり得ます。同様に、再洗礼派の教会史に登場する英雄たちの物語は、聖霊がこんにちの教会に告げることを理解する窓にもなり得るのです。

—ネルソン・クレイビルはMWC会長（2015～2021年）。米国インディアナ州在住。

MWC Publications Request

I would like to receive:

MWC Info
A monthly email newsletter with links to articles on the MWC website.

- ☐ English
- ☐ Spanish
- ☐ French

Courier
Magazine published twice a year (April and October)

- ☐ English
- ☐ Spanish
- ☐ French

- ☐ Electronic Version (pdf)
- ☐ Print Version

☐ Mailing delays? Consider the benefits of electronic subscription. Check this box to receive your *Courier/Correo/Courrier* subscription via email only.

Name

_____

Address

_____

_____

_____

Email

_____

Phone

_____

Complete this form and send to:

Mennonite World Conference
50 Kent Avenue, Suite 206
Kitchener, Ontario N2G 3R1 Canada

Photo: Life TV Indonesia

み言葉に変えられる

メノナイト世界会議は、「リニューアル2027」と題する10年がかりの催しを世界各地で行い、私たちの信仰共同体の500周年を記念することになりました。この10年のプログラムを通して、私たちの歴史に見られる地球的・超教派的・脱文化的な視点に注目していきたいと思います。

この催しでは、未来を展望するために過去を振り返ります。コロンビア出身のノーベル賞作家ガブリエル・ガルシア・マルケスがいうとおり、「人生で大切なのは何が起きるかではなく、何を記憶するか、それをどう記憶するか」なのです。私たちのルーツに正面から向き合い、私たちが受け継いだ信仰の遺産を神に感謝したいものです。同時に、悔い改めと刷新の気持ちで主に近づき、過去に学んで、現在から将来にわたる神との関係を成長させていきたいと思います。

リニューアル2027の第1弾「み言葉に変えられる：アナバプテストの視点で聖書を読む」では、マルチン・ルターの「聖書のみ」が、「キリストにならいて」という修道的理想と相まって、私たちの伝統にどんな役割を果たしてきたか、そして聖書が私たちのグローバルな信仰共同体にとって、こんにちどのような意味をもっているか、探求しました。

アウグスブルク（ドイツ）での催しの間、私はアムステルダムのメノナイト教会で見たアート作品を思い起こしていました（今号の表紙写真）。会堂の中央の説教壇では開かれた聖書が動いていて、聖書のページが飛び出したり戻ったりしながら会堂の中をひらひら飛びかっていました。

このアート作品は、聖書が生きた文書であり、聖霊の働きを通して私たち自身の歴史をもそのページに取り込むものであることを表しています。使徒言行録にある最初の弟子たちの物語も、そうやって伝えられてきました。アナバプティズムが強調する「キリストにならう」ことで、聖書は私たちが生きる上での脚本となり、私たちはそれを実際に演じ、日常的に実行するよう招かれるのです。

とはいえ、アナバプティズムの歴史において、聖書はいつもそのように捉えられてきたわけではありません。

たいていの場合、私たちは聖書の文言を用いて、他の人々が教義的に正しいかどうかを判定し、その結果、キリストのからだの内側に分裂や分散化を引き起こしています。聖書についての見方が折り合わないことが表面化するたび、しょっちゅうすぎるくらい教会は分裂を繰り返してきました。

多様性の只中に与えられる一致の賜物を生き方として実践するようにという聖書の招きを、私たちは脇へ置きすぎてきました。多様性にもかかわらず、いや多様性を通して与えられる交わりの賜物を無視してきました。悲しむべきことに、道徳的・教義的に異なっていることを、キリストのからだを分裂させるに足る理由であると信じるようになってしまったのです。

こんにち私たちは、共同体とキリストを中心として聖書を解釈し、また実践することを重んじる伝統を神に感謝する一方で、聖書の読みが不十分なため引き起こされた分裂について悔い改め続けなければなりません。反省の気持ちが私たちを新たにしてくれるよう、自分の罪と、それによって損なわれた教会の一致を認めることができるよう、求めていきましょう。

現代に語りかける生きた文書をとおして、私たちの聖書理解が新たにされますように、私たちの間にある分裂を、取り除かれるべき罪と捉えられますように、そして、現代に聖書を適用・実践しようという思いが私たちを一つにして、相互依存の精神を共有できますように。

私たちが、み言葉によって変えられますように。

セザール・ガルシア氏はMWC事務局長。ボゴタ（コロンビア）の本部オフィス勤務。